夢現物語

hurosuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢現物語

【Ｎコード】
Ｎ５０２２Ｉ

【作者名】
ｈｕｒｏｓｕｔｏ

【あらすじ】
暑い夏の日、変わらぬ日常――　男子高校生、赤嶺椿は偶然的に、あるいは必然的に、穏やかで平和な日々を失い、異世界へととばされる。そこで彼を待ち受けている運命とは――。
（申し訳ございません。ただいま連載休止中です。いつ活動するか現時点では未定です。）

プロローグ上　「いつもの誕生日」

変わらない毎日。

別に不満ってわけじゃないけど、

少し、ほんの少しだけ退屈だとそう思った。

そう思ってしまった。

それが、原因なのかは分からない。

それは願いが叶ったことのように――

願いが叶ってしまったかのように――

本気で望んだわけでもないのに――

突然、俺の日常は大きく変化してしまった――いや、俺の周りにいる奴等も巻き添えにしてしまった。

俺の所為(せい)だったのか。俺が原因だったのか・・・。

こういう風に考えてしまったのは、原因を明らかにしたかったのかもしれない。

八月三日。今でも覚えている。
この日は六条聖歌（ろくじょうせいか）という少女、つまりは俺の幼馴染でもあるこの少女の十七歳の誕生日であった。
そして、俺たちがこの世界からいなくなる日でもあった・・・。

午後十二時七分。
竹林の中、一人の青年が石段を上っていた。
彼の名前は、赤嶺椿（あかみねつばき）、高校二年生だ。

「アァァァァァアッヂ～～～～まじで死ぃぬぅう～～～～」

夏休みの昼前、俺は聖歌の家に向かっていた。

六条聖歌の家は山の上にある神社だった。
聖歌の苗字である「六条」とは、「永久神社」という神社を守護してきた一族の名らしい。
六条家というのが、どれほどすごいのか分からないことだがこんな山奥に神社を建てたせいで
毎年彼はこんな辺鄙な場所に、しかもこの蒸し暑い日に神社に向かうための数百段にも上る石段を、一歩一歩懸命に上っていくハメになってしまった。

（この石段を昇っていくのには常人（つまりこの場合俺）には辛すぎる。あいつ、いつもここから学校に通っているのか・・・？だとしたら、六条家とは化け物みたいな筋肉集団だったんだな。女子高校生が、こんな山奥から一人で通学、帰宅そして遊びに行ったりできるはずがない。うん、そうだ。そうに違いない。）
現に俺は一時集合と言われているのに、一時間前からここに来て昇っている。

ふと携帯を取り出して画面を見る。現在午後十二時三十七分。
身体中汗びっしょり。汗を拭っても止め処なく流れてくる。
（小さいころは両親に一緒についてもらっていたおかげで、親父に肩車してもらって楽だったが、それも昔の話、今は当然一人だ。おかげで今では足腰が鍛えられて、本気で走ったら世界で最速な男になれそうだ。・・・まぁ、そんなわけないけど。）

それから、二十分後。つまりは、十二時五十七分。
やっと、神社の鳥居が見えてきた。
あと少し――
そこで俺は力尽きた。
「あぁ～もうだめ・・・」

・・・これまた十分後。つまり約束の時刻七分オーバーである。
十分体力が回復したところで、俺は玄関まで歩く。
和風な家、玄関には色鮮やかな花々が咲いていた。

（さて少し遅れてしまったが、問題はないだろう。）

インターホンを鳴らす。中から返事が聞こえた。聖歌の声だ。
「はいは～い。今行きます。」
ガチャ、扉が開く。
現れたのは肩よりまっすぐに伸びた黒くて長い髪の少女だった。身長は椿より８?ほど低い少女、彼女こそが「六条聖歌」である。
扉を開けた彼女は俺が挨拶を言う前に、
「椿、臭い」
そう言われてしまった。
いきなりついてまもない玄関の前に立っている幼馴染の俺にそんなことを言った。

（対応ひどいな、よし帰るか。）

俺は無言のまま身体を１８０度捻り、そして、右手を軽くあげ立ち去ろうとした。
漢らしい去り方である。

「ご、ごめん、嘘だから嘘、いや嘘じゃないけど本当なんだけど、嘘、うん、そうそう、うーそーだーかーらー！！」
俺が行動（アクション）を起こしたら、変なフォローを入れてきた。
「嘘なのか本当なのかはっきりしろよ。曖昧な態度はむしろ傷つくぞ」
俺は立ち止まってから聖歌のほうへ振り返って言った。

「だ、だって、本当に汗臭かったんだもん」
「まぁ、しかたねぇっていったらそうなんだけどな。やっぱりこの暑さとここまでの距離があったからな・・・って待てよ。お前今さっき汗臭いじゃなくてただ臭いって言ったよな？」
「言ってない」

（俺は決して耳が悪いほうではない。・・・こいつ、事実を変えようとしてやがる・・・。だが、そうはいくか。俺の追及から逃れるはずがない！）

「いや、言ったよな？」
「幻聴でしょ？」
「でも、臭いって三文字しか聞こえなかったと思うんだけど・・・」
「汗臭いって私は言いました」
「いやでも・・・」
「言ってません」

（ふむ。どこまでも逃げようとするやつだ。いっそのこと罠を仕掛けるか。）

「そうだよな。お前がそんなひどいことというわけないよな～」
まずは、肯定する。
「うん、そうだよ」
よし、食いついた。
「俺みたいな綺麗な人間は体臭きつくないもんな～」
「そうだよ。椿みたいなきれいな人間にそんなことあるわけ無いじ

ゃん」
「むしろ、俺にはハーブのにおいが一日中かおっているからなぁ」
「うん・・・そうだね」
「もしそういう風に聞こえていたら、お前が臭かったってことなん――へぎょ！？」
最後まで言う前に正面から靴べらがとんで来た。その靴べらは俺の額に当たった。

――こうかはばつぐんのようだ。

「いっつってぇ、何すんだ靴べら女！！」

（靴べらの印象が強すぎてそんな暴言をいっちゃった。聞いたことないよ・・・。そんな暴言。）

「ふん、仕方ないじゃん。だって椿、本当に臭かったんだもん」
聖歌は意味不明な俺の言葉を無視し（これはありがたいこと）、自分の発言を認めた。
（この女、開き直りやがったな。）
「ほら、早く家に入って。シャワー貸してあげるから」
椿はさっき投げられた靴べら持って玄関に入った。
（ちなみにさっきまでのやりとりは俺たちの中では毎年のお約束みたいな行為だ。まぁ、靴べらは初体験だったが。そして、毎年ここに来るまで汗をかいてしまうのでいつもこの家のシャワーを使わせてもらうのである。）

五分後――。

風呂場から出た俺は、洗面所においた鞄から用意してあった着替えに着替えて（シャレじゃないよ）、洗面所から出る。ふと彼は左を向く。そこは玄関で俺と聖歌の靴以外に靴が二つ増えていた。

（あぁ、あいつら来たのか。）

リビングへ向かう。扉が完全に閉まってはいなかったので中から話し声が聞こえていた。
俺は扉を開け、入った。
リビングには二人の青年がいた。
「よう、廉。あとついでに神崎」
俺は二人にあいさつした。

「あ、久しぶり～椿」

そう答える青年は、髪が長く（とはいっても聖歌みたいに肩より下に行くほど長くは無い）、俺より2，3ｃｍほど身長が低い。
彼の名は麻倉廉（あさくられん）。聖歌と同じく俺の幼馴染である。

（さて、いつもならこの三人でパァーっと楽しく過ごせるのだが、一匹邪魔、いや厄介とでも言おうか。
そんな男がいた。）

「ついでって、ひどくね？椿くん」

眼鏡をかけ、俺より身長が５ｃｍほど高いこの青年は、神崎氷雨（かんざきひさめ）、椿と同じクラスで二年二組（ついでに言うと廉は一組、聖歌は三組）。

なんでも、大手会社の神埼グループの御子息らしい。
ちなみに、いつか本性を表すと思うので先に言うがかなりの女好き、というか単なる変態である。
一緒にいても何をするかと思えば、ナンパか変態的な言動と行動それ以外には何もない。
ちなみに、ナンパはおれが見た中で成功例はない。

（さて、さっきから俺基準で身長を語っているが、俺の身長を語っていなかったな。
俺の身長は１７３?。つまり、神崎が１７８?、俺１７３?、廉１７１?、聖歌１６５?といったところか。
ちなみに、俺の推測ね。さて、紹介はここまでにし本題に戻ろう。）

「二人ともいつ来たんだ?」
椿は二人に聞いた。
「う～んとね、三分くらい前に神崎君と一緒に来たよ」
廉が答える。

ちなみに何故クラスが違うのに廉と神埼はお互いを知っている理由を言おう。
椿と聖歌、廉、神崎は一緒に下校する中だ。どんな感じで仲良くなったかは、時間があったときに話そう。

「で、どうだったの?」
神崎がニヤニヤした顔でこっちを見る。

（きもちりぃ・・・。まぁ、個人的な感想はおいといて。）

「なにが？」

椿は質問の意図が分からなかった。

「またまた～、とぼけっちゃって～」

（マジで分からん。分かることは目の前にいるこの眼鏡をかけた生物を殴りたいという欲求だけだった。）

「だから、なにがだよ」

「だ・か・ら、聖歌ちゃんがいつも使っているお――ぶふぉお！？」

真横から北海道の名産品、熊の木彫りがとんできた。あのシャケ銜（くわ）えてるやつね。

まぁ、流れで分かると思うけど言おう。投げたのは聖歌だと。

さっきから、マニアックなものを投げる習性が彼女にはあるようだ。

「椿～～、まさかあんた、家のお風呂で変なことしていないよね？」

「し、してないよ」

（やばい、目が怖い。怖いよこの人！目が合わせられない。本当にしてないよ。僕は無実だよ。信じてよ。

だから右手に持っているその熊の木彫り二発目はどっかに置いといて――！）

しばらくその状態が続く。さぁ、判決は――

「・・・そう、だったらいい」

そういって構えていた。熊の木彫りをそっと机に置いた。

安心した後で俺は気付いたことがあった。それは――

「なぁ、廉」

「ん？なぁに？椿」

さっきまでの修羅場なんとも思っていないようだった。

（そういや、こいつ天然だったな。ここで、天然という性格が影響するかは俺は天然じゃないから知らないけど。）
俺が話しかけるまでキョトンとしていた。恐るべし、天然！！とまぁ冗談は置いといて。

「なんでこんな暑い日なのにお前ら汗ひとつかいてないんだ？」
こんな日差しの強い中、普通汗ひとつかいてないのはおかしい。
そう思った。
「ああ、そのことね。う～んとねぇ、椿にはなるべく言いたくなかったんだけど」
廉はチラっと神崎を目にやる。
まぁ、神崎はさっきの攻撃をもろにくらったわけだから、復活していなかった。
（俺に言いたくないこと・・・？なんなんだ？）
神崎に向けた目を今度は聖歌におくる。
俺も聖歌のほうを見る。
聖歌は、廉の言いたいことを分かっているかのようにアイコンタクトをおくった。
それを確かめた。廉は俺に言った。俺にとっては衝撃的なことを。

「車で来たんだ」

その一言で俺は愕然となった。
「で、でも他に道なんてないだろ？」
「実は、椿が来た方向の反対に坂道があったんだよ」

（俺の、俺の苦労は・・・？）

その後神崎が目覚めるまで暴れていようかと思って暴れていたが、聖歌の投げた熊の木彫りによって俺の活動は停止し気を失ってしまった。

いつもこんな感じだった。
わいわい楽しく騒ぎ、ふざけあっていたけど、これがいつものことだった。
彼らは、それが幸せだった。
それがいつものことだったから。
この幸せがいつまでも、当たり前のように続く――
そう思った。そう思っていた。そう思ってしまっていた。
だが、不運にも彼らの日常は脆く崩れ去ってしまうのである。
大事なものを奪われて――

現在十三時五十七分。
あの出来事まで、後七時間三分。

プロローグ中　「動きつつある運命」

現在の時刻は分からないが、たぶん空を見るかぎり夜であろう。
月は満月、夜空には星々が輝き、所々美しい星座をつくりだしていた。
そんな鮮やかな、感動的とも言えるそんな夜のこと。

周りはジャングルのような木々に囲まれている古い建築物があった。
アヌビス神殿、そう人々はここのことを呼んでいる。

この神殿に入るためには長い階段を昇っていかなければならないのだが、
その階段には白い装束の男達が倒れていた。
ある者は上半身と下半身が離れ内臓がとびでて死んでいる者、
両手両足が胴体から離れた場所にある者、
全員がそのような状態で死んでいた。
その数、二十六名。死体はまるで道のように建造物の中まで続いていた。

アヌビス神殿内部

「ぐはっ」
一人の白い装束を着た男が倒れる。
「やれやれ、お前ら弱すぎっつーか、俺が強すぎっつーかなんつーか」
金髪で髪の短い男は言う。
二十七人目を殺してそんなことを言う。

眠そうに、かったるそうに――。
彼は武装していなかった。手ぶらである。なのに人を殺した。
どうやって――？

「あわわわわっ」
奥にいた老人は尻餅をついた状態で正面の男を怖れた。
「さて、あとじーさんだけか」
男は言う。これまた、かったるそうに。
「どうする？腹から臓物なんかを溢れ出しながら無惨に逝く？それとも痛みを感じる前に逝く？どっちがいい？」
眠そうな目でそう言った。

「お、おお、お前の目的はなんだ。か、金か？そ、そそそ、そんなものここにはーー「ねぇんだろ」
老人が最後までいう前に
男が口をはさむ。
これまた、かったるそうに――

「分かってるよ。そんなこと始めっからな」
「じ、じゃあ何が目的なんだ」
「門（ゲート）」
男は短くそう答えた。
老人はその言葉に過敏に反応した。
「な、なぜ、それを知っている！この世界でたった三人しか知らないことを」
恐怖より驚きが勝った。
「んなもん、その内の一人が俺に教えたに決まってんだろ」
冷めた風に言う。

ありえない。そんなこと。私と陛下が相手に情報をもらすはずがない。
そして、残りの一人は遥か昔に亡くなったはず――

「まぁなんだ。門をあけてもらおうか。切り刻まれて無惨な最期をおくりたくないだろ？」
頭を掻きながら男は言った。
怠そうに――。

しかし、老人は突然、笑い始める。
「あはははははははははっはははっはっ」

「ん？どうした。頭おかしくなったか？」
戸惑う表情をうかべる。
さっきまで、びくびくしていたのに今は余裕な表情を浮かべ皮肉った口調で老人は言った。
「馬鹿め、門を開くためには代償が必要なんじゃよ！お前に払える代償があるのか？例えば、自分自身の命、とかな」

あえて、「自分自身」を強調をした。
諦めさせるために。
または運良く自滅させるために。

男はしばらく考える。そぶりを見せる。そして、口が開き、言葉を発した。

「そうか、それは知らなかったな」

驚きながらも、そう言うこの時は怠そうにではなく、普通に言った。
――あきらめたのか・・・？
しかし、思い通りにはなかった。
彼は思ってもいないとんでもないことを言った。
「じゃあ、代償が必要だというのならあんたの命を使わせてもらうぜ」

午後六時八分――。
聖歌の家で散々といっていいほど遊び尽くした俺達は玄関の前で廉を待っていた。

「悪いな、長い時間いすまっちまって」
「ううん、いいよ。それよりもありがとう」
「？？？なんのこと？」
「だから、毎年この日にきて貰って」
「ああ、そのことか。気にすんなって。だって俺達ーー」
幼馴染だろ。そう最後に言った。
しかし、彼女は何故か残念な表情をうかべ、
「そう、だよね・・・私達、幼馴染なんだよね・・・」

（ん？俺なんかマズイこといったかな？）

空気が重くなる。

「おやおや～、なんか重っ苦しい空気が流れてますね～。もしかして、夫婦喧嘩ーーめじゅら！？」

神崎が言葉をはさんだが、いつもの如く最後まで言わせてもらえず、散っていった。しかしいつもと違うのは、神崎に一瞥せずに、しかも攻撃したのは俺の左腕だった。
放たれた俺の左拳が見事に神崎の肺にクリティカルヒットした。

「ちょ、ちょっと、なんで、つ、椿が、？」
「ああ、悪い悪い。てっきり、たちの悪いチンピラか、眼鏡をかけた変態かと思った」

ごめんごめんと頭を下げる。

「いや、最後の、ほう、俺、限定してる、じゃん」
「気のせいだ」
「いや、断定して、た、だろ」
「じゃあ、木の精だ」
「お前、霊感、あるのか！？」
神崎は驚く。

玄関の扉が開く。
廉だった。

「遅れてごめーん、・・・って皆どうしたの？」
「廉くん、実は――おぅっ！！？」
「いや、なんでもないよ廉」
俺と聖歌が神崎の足を踏んづけて答えた。
「まぁ、なんでもないならいいけど・・・。」
廉は戸惑った表情をうかべながらそう言った。

少し時間がたち――

「じゃあ、またな」
「うん、またね」
俺達はそのまま帰ろうとしたら、
俺の耳をつかんで聖歌は「ちょっと待って」と言った。

「いててて！離せ」
しかし、聖歌は俺の言葉を無視し、
俺の耳に顔を近付き「今日の9時ぐらいにまた来て」と小声で言った。
「俺は過去に戻ることはできんぞ」
「馬鹿、だれが午前っていたのよ。午後よ」
（いや、午後とも言ってないぞ。）
「あ～、分かった。じゃあ、あの二人にも言っとくよ」

「馬鹿、あんただけ来ればいいの！」
「ん？なんで俺だけ？」
「そ、それは、え、えーとっ、は、話、そう、話があるのよ。大事な話」
「ふ～ん、そう、分かった。いいぜ。午後９時な」
俺が確認したら、聖歌はやっと俺の耳を離してくれた。
（あーっ、やっと離してくれた。俺の耳絶対伸びちまった。）
「おーい、椿、何やってんのー？神崎くん家の人がおくってくれるってー」
廉が遠くから大声で言った。
「ああー、分かったー。今行く。じゃあ、またあとでな聖歌」
「うん、じゃあバイバイ」
俺は聖歌に別れを告げ、
廉の所へ走っていった。

「なにイチャついていたんだよ？ハッ、ま、まさか夜、密会でもするのか！？辺りが暗くなったのをいいことにラヴコメ的な展開に持ち込むつもりなんだな！」
（・・・半分当たりで半分間違ってるとか、むしろ１００％当てることよりすげーよ。）
帰りの車中。車が発進した瞬間神崎はそう言った。
さすが、神崎家、お出迎えがリムジンとはな。
無駄に長い座席と、無駄に長いテーブルと、明らかに邪魔な冷蔵庫が車中にあった。
無駄無駄言って印象悪そうに言っているが、実際そういう風に言っているのでそこを感じとってもらいたい。

「黙っているってことは、そうなんだな！くぅ～う羨ましすぎるぜ。でも、幼馴染との恋愛は王道すぎるだろう。あ～あ、今夜聖歌ちゃんが女になってしまうのか」
さらに、神崎は妄想話を続ける。
「聖歌は、もともと女の子だよ？」
「廉、こいつの言うことはとりあえず無視しろ。馬鹿か、変態か、その両方をもらうことになるぞ」

にしても、やはり気になる。聖歌は俺に何を伝えたいだろう――？話っていったい何の話なんだ？

だが、彼はその聖歌の話を聞くことはできなかったのだ。

現在六時二十四分――。
あの出来事まで、あと二時間三十六分後。

プロローグ下　「謎の男と門」

永久神社。六条家という名高い一族が守護してきた神社。
また、六条聖歌が住んでいる家である。

この神社には、ある言い伝えがあった。
四百年ほど前のことである。
この世界に（つまり椿や聖歌が住んでいる世界のこと）、一人の巫女がいた。
六条家の者である。
彼女には使命があった。
それは、六条家の者であり、選ばれた「巫女」でしか出来ない事であった。
それは、「閉鎖」と呼ばれた儀式。
当時、この世界ではもうひとつの「世界」があった。
異世界、平行世界（パラレルワールド）とでも言ってもいい。
つまり、この世界とあっちの世界が自由に行き来出来てしまっていた、ということ。
これにより、互いの世界の住人は混乱し、やがて戦争が起きてしまった。
戦いは永きに亘った。
互いの被害は膨大な数に上り、両世界は壊滅状態に近い状態にまで陥った。
当時のこの世界の王は悩んだ果てにある一族の力を借りた。
それが、六条家の者たちだった――
六条家は代々常人には持っていない「能力（ちから）」を持っていた。
その彼らの中で選ばれた巫女。
六条永久（ろくじょうとわ）（選ばれた巫女の名である）は、「閉鎖」を行った。

閉鎖は名のとおり、こちらとあちらを繋ぐ門（ゲート）を閉じることである。
そのためには、巫女があちらの世界へと行きかなくてはならなかった。
彼女、永久は向こうの世界に送られた。
本人の意思に関係なく――

彼女を送り、無事に「閉鎖」を行った残りの六条家の者たち。
こうして、両世界の争いは無くなり平和になった。
儀式に使われた神社は彼女の名をとり「永久神社（とこしえじんじゃ）」と名づけられた。
それから四百年間、この神社を守ってきた六条家。
長い年月がたち、人々の記憶からは忘れられてしまった――

否、正しくいうなら当時の王は他の能力を持っていた六条家の者に頼み、彼女の存在を消した。
理由は分からないが、元々存在しなかったことにしようとしたのだ。
ひどいことに、皆の記憶から消したのだ。
一人の女性がこの世界にいたことを。一人の女性が犠牲になったことを。
彼女を送った六条家でさえ、月日が経つにつれ忘れていったのである。

時は現代に戻り、永久神社。
聖歌の部屋――

「つ、椿、あ、ああ。あの、ずっと前から言いたいことがあったんだけど」
この部屋には一人の少女しかいない。
「え、えーと、その、あの、その、・・・はぁ、だめだこりゃ」
本人を前にしてもこの状態。絶望的だ。
時計をみる。現在八時四十四分。
「あと、十六分かぁ」
椿が来るまでに何とかちゃんと言える練習をしたいんだけどこの調子じゃ無理だよね。
聖歌はため息をしながら、自分のベッドへ倒れるようにして横になる。
思えば椿との付きあいは十年以上にもなった。
その間、いくらでも言う機会はあった。
けど、言えなかった――。
「向こうから、言ってくれれば楽なんだけどなぁ」
恥ずかしい思いしなくて済むし。そう思った。

彼女が考え事していると、突然インターホンの音が聞こえた。
どーせ、お母さんが出てくれるよね。・・・ってお母さん今出かけてるんだった。
椿にしては早すぎるから、宅急便とかかな。
すぐに身体を起こし、急いで玄関へと向かう。
「はいは～い、今行きます。」
そう言って、靴を履きドアを開ける。

目の前には一人の男がいた。
真夏に黒いコートで身体をつつみ、髪の色は金髪で長さは短い。そ

んな男がいた。
男はいきなり尋ねる。
「あのさ、あんたが六条聖歌さん？」
「はぁ、そうですが」

（この人誰？私を知ってるの？）

「ほ～あんたがか」
そういいながら、聖歌に顔を近づけジロジロと確認するように見る。
観察する。

（な、なに？この人？）

男は十分に確認したあと、顔をあげ口元を緩ませて言った。
「ふ～ん。なるほどな。たしかにあの人に似てるは。まぁいいや。
ところでさぁ、あんたこの神社の名前なんていうか知ってるか？」
これまた突然質問される。
「え、えいきゅうじんじゃ・・・」
聖歌の答えを聞いた男は突然、大笑いした。
「ぶっひゃひゃひゃっひゃひゃひゃひゃはははははは、
え、えいきゅうじんじゃとか、マジでウケる。くひゃひゃひゃひゃ
ひゃ」
男は腹を抱えながら馬鹿笑いする。
前で見ている聖歌は戸惑う。
「な、なにがおかしいんですか！」
戸惑いながらも言った。

男はわりぃわりぃ、と腹を抱えながら笑って言った。
「いや～、だ、だってよ、読み方もろに間違ってるしよ。や、やっぱりこちら側の奴らは忘れちまってるんだなぁって思ってよ。ま、マジでウケる」
ひーひーっと笑いながら目を擦る。どうやら笑っていたら、涙がでてきたようだった。
「さてと、十分に笑わしてもらって悪いんだが本題に入らしてもらうぜ。あんた四百年前のことどれだけ知ってるか？」
「よ、四百年前って言われても・・・」

（一体、さっきから何のことを言ってるの！？）

「ああっ？まさか、マジで知らねーのかよ！？」
心底驚いたようだった。
「おいおい、冗談じゃねーぞ。・・・あ、でもこっちのやつらは記憶を消されたってレーウェンから聞いちゃいたが、まさか本当だったとはねぇ」
男は考える素振りを見せたが、すぐにやめ、
「まぁ、いっか。知っててもも、知らなくても俺には関係ねーし」
心底どうでもいいような口調で言った。
「さて、随分と喋っちまったな。ところで、嬢ちゃん今何時？」
「えっと・・・」

時計を見る。今は・・・。

「八時五十三分、です」
十分ぐらい経っていた。

男は時間を聞くなり、
「あー、もうそんな時間？無駄話しちゃいすぎたな。反省反省っと。

じゃあ、嬢ちゃんちょいとごめんね」
そう言ったのち、何が起こったのか彼女には分からなかった。
ただひとつだけ、分かったことは――

（い、息ができない！この人、私に何をしたの！）
「くっ・・・、かぁ・・・、」
（苦しい。だれかたすけて！）
意識が　朦朧（もうろう）とする。視界がぼやける。
ただ、微かに目の前の男はこう言ったかもしれない。
「おやすみ、聖歌ちゃん」

八時四十五分――
ちょうど、聖歌と謎の男がしゃっべている時。
石段を上っている青年がいた。赤嶺椿だ。

「いいかげんしろよお前ら」
俺は立ち止まり、後ろにいる人物に言った。
「うっ、ば、ばれてたの・・・？」
（この声は、神崎の声だな・・・。）
後ろを振り返る、そこには神崎と廉がいた。

（廉がいたことには、驚いたな・・・。）

「そこの変態はともかく、なんで廉がいるんだ？」

「変態ってひどくね？」

廉ではなく、先に神崎が言った。

（お前に感想を求めちゃいねーよ。）

「黙って付いてきたことには謝るけど、椿と聖歌は僕たちには内緒で楽しいことをやるんでしょ？」

「楽しいこと？そんなこと言ってもないし、するつもりもねーぞ？」

（なんのことだ？）

「えーっ、でも僕聞いたよ？か――」「あばらっ！？」

廉が最後まで言う前に椿の右ストレートが神崎の顔面に命中した。

「――んざき君からってあれ？」

神崎が殴られたことに気付く廉。

「やっぱりな。廉気にするな。いいか廉。こいつは精神疾患なんだ」

「せいしんしっかん？」

「そうだ。神崎は俺らに心配かけまいと常人の振りをしてきたんだ。あいつだって本当は辛かったんだ」

「ちょっとそこ俺のキャラ付け加えたりしないでもらえない！しかも俺マジで常人だから！！」

神崎が俺にツッコむ。

（チッ、立ち直りの早い奴だ。）

「で？なんて言われたの？聖歌ちゃんに」
神崎が言った。俺の後ろを歩きながら。
「なんだかしんねーけど、話があるんだとよ。俺に」
「告白だったりして」
「んなわけあるか。あいつとは小学校からの腐れ縁だ」
「いや、実際そうだったらどーすんの？お前振るのか？」
「安心しろ。俺にとってあいつは親友だ。それにあいつ、聖歌もそう思ってるよ」
「じゃあ、僕は？」
「廉は親友だ。昔っからのな」
「じゃあ俺は？」
「お前は変態だ」
「えっ、ちょ、話の流れおかしくない？」
「そうか？ちゃんと受け答えにはなっていると思うが」
「・・・もう少し愛を下さい」
「ま、まさか、お前ゲイだったのか！？」
「全然全くちげーよ！」
「そうか。そうだったのか・・・。だからやたらに俺と聖歌のことを気にしていたのか・・・」
「だから、違うって！！」
「すまない。神崎、お前の気持ちに気付けなくて・・・。お前がそんなに俺のことを気にしていたなんて！俺はなんて馬鹿だったんだ！」
「あのー、話聞いてもらえます？」
「だがすまない、神崎。俺は同性愛者ではないんだ。俺はお前と同じ道には歩めないんだ」
「聞こえてますー？」
「それにお前のことを動物以上人間未満と認知しているんだ。だか

ら人間的お付き合いはちょっと――」
「お前今まで俺のことどんな風に見てきたんだよ！ひどすぎるだろ！！つーか俺人間未満だったらお前どうやってコミュニケーションとってきたんだよ！！！」
「ん？それはテレパシーじゃなかったのか？」
「いや、今現在しゃっべってんだろ・・・」

しばらくして――

「あー、やっと到着ってか」
最後の石段を上り終え、神崎は言った。
携帯を開き、時間を確認する。
八時五十六分か――

「さて、じゃあ俺聖歌の家に行ってくるから、お前らそこで待ってろよ」
俺は二人に言ったが、
「えーっ、僕たちも一緒に行ってもいいじゃん」
「みずくさいぞ、俺らを置いていくなんて」
と、それぞれ返事が返ってきた。
「ここできちんと待っているか、あいつに地獄へ送られるのどっちがいい？」
「ここでお利口さんでまっています」
息ぴったりだった。
「じゃ、そこで待ってろよ」

そういって、俺は聖歌の自宅へ向かおうとしたが廉が、ちょっと待ってと言った。
「ん？どうした」
「あれ・・・」
そう言いながら、彼は指で場所を指した。

そこはここから二十mほど離れた、森が生い茂っているところなのだが、なぜかは分からないがぽっかりと、だ円状の穴が地面ではなく、なんかの入り口みたいに開いていたのだった。

「なんだあれ・・・？」
「いや、僕に言われても・・・」
廉は俺の言葉を聞いて戸惑う。
「なんかおもしろそうじゃん。行ってみようぜ」
神崎は言う。
いや、少し様子を見たほうが――
そう言いおうとしたが、言葉が出なかった。
彼の視界にその穴に近づいていく一人の男が映った。髪は金髪で短い。
黒いコートに身体を包み、そして――

そして、一人の少女をお姫様だっこで抱えていた。

（あ、あれは――せ、聖歌！？）

「な、あ、あれは聖歌ちゃんじゃねーかぁ！？どういった状況だぁ、これ！？」

（知るか、俺が知りたいわ！！）

男は穴の一歩手前まで移動し、そして立ち止まる。
そして。そして、俺らを見た。
眠そうな顔つきで。

そして、口元を緩ませ俺らに十分聞こえるほどの大きな声で言った。

「残念だったな。このお嬢ちゃんは貰っていくぞ」

そう言って、男は穴に入っていき消えてゆく。

「な、待ちやがれ！」
俺は穴の方まで向かって走っていく。
「ちょ、椿待って！」
廉が俺に続いて走ってくる。
「いったいどーなってんだ！？なんであいつ聖歌ちゃんをお姫様抱っこしてんだ？知り合いなのか。椿お前あいつ知ってるか？」
「知らねーよ！！俺が今まで見たこともない穴ん中に入っていく男を知ってるわけないだろ！！廉お前は！」
「ぼ、僕だって知ってるわけないよ」
やっと穴の前までたどり着く。
近くまで来てはみたが、よく分からないままだった。
穴の中を見ると永遠に続いている、闇しかなかった。
「後ろは何もなってないな」
後ろにまわってみた神崎は言う。

（一体どうなってんだ？）

俺はとりあえず、ゆっくりと穴の方に右腕を突っ込んでみた。
すると突然、強い風、竜巻が現れた。
そして、穴のほうへゆっくりとだが吸い込まれていく自分自身の身体。
「くっ、・・・」
「椿、掴まれ！」
神崎が右手を差し出す。
俺は左手で掴もうとする。

（も、もう少し！）

しかし、神崎の手を掴めずに俺は穴の中に吸い込まれていった。
「椿ーーーーーーーーーーーーーー！」
廉がそう叫んだ声は聞こえた気がした。
そこ以降、俺は俺自身がどうなったかは覚えてない・・・。

「ど、どど、どどどどど、どうしよう！か、神崎君！つ、椿が穴の中に引き込まれていっちゃったよ」
テンパってる廉。パニック状態に陥っているようだった。
その隣には、神崎。
彼は黙って親指と人差し指で眼鏡を掛け直す。
何か考えている様子だった。
「ねー、聞いてるの！神崎君！？」
廉は再度神崎に言う。
だが、神崎は廉の言っていることを無視し、彼はこう言った。
「なぁ、廉君。俺らも行ってみるか。この中に」

こうして、俺らは異世界へと旅立った。
あの男が何者なのか。向こう側はどうなっているのか。
なぜ、聖歌を連れ去っていったのか。
そんなことを深くは考えずに俺らは旅立った。
この先、どんなことが起こるかを全く想像せずに――

第一話　「もうひとつの世界で」（前書き）

今までの登場人物紹介。

赤嶺椿（あかみねつばき）　高校二年生。この物語の主人公。

六条聖歌（ろくじょうせいか）　高校二年生。椿の幼馴染。謎の男によって異世界に連れて行かれる

麻倉廉（あさくられん）高校二年生。椿と聖歌共通の幼馴染。異世界に行くが現在行方不明。

神崎氷雨（かんざきひさめ）高校二年生。廉と同じく異世界に行くが現在行方不明。

謎の男　現在詳細不明。

第一話　「もうひとつの世界で」

暗闇の中、目の前に聖歌が歩いていた。
「聖歌」
俺は彼女の名前を呼ぶ。
しかし、彼女は振り返らない。
それどころか、スタスタと前に進んでいく。
「聖歌、待ってくれ聖歌」
俺はさっきよりも大きな声で叫んだ。
彼女は声に気付いたのか、くるっと反転し言った。
「私に構わないで」
えっ？
言葉が出ない。なぜいきなりそう言うんだ！？
「私のこと忘れて、お願い椿」
「ど、どういうことだよ。なんでだよ」
「出ないと」
そこで聖歌は言葉を一拍とめ強調するように言った。
「あなたが死んでしまうから」

「うわあああああああああああああああああああああああぁ！！」
とび起きた。汗びっしょりだ。
（ゆ、夢か・・・。）
辺りを確認する。
草が生え、木が生い茂り、小鳥がさえずる。つまり、ここは森の中。

そして、空は明るい。
俺はは立ち上がり、辺りを確認する。
どうやら穴ん中に入ったら、ここに辿り着いてしまったようだ。
「入ってみたはいいものの、ここはどこだ？」
（そういや、廉と神埼を忘れてきてしまったな。あいつら、どうしてんだろ。付いてきたのか？だとしたら、普通近くにいたりするもんだけど・・・。）
再度確認。
木、木、草、木、草、木、木、草、木、木、人、木、草、木、・・・。

（ん？ちょっと待て、今人がいなかったか？）
俺は人がいたほうを見る。
やはり少し遠くの方に人影が見える。
（もしかして、廉か？神崎か？それともあの男か。）
とりあえず、近づいてみる。
俺はゆっくりと歩き、相手に悟られないように向かった。
少しづつ、相手の姿が分かってくる。
姿や着ている物から判断して、どうやら廉でも神崎でもあの男でも聖歌でもなかった。
鎧を着た人物、後ろ姿でキョロキョロと辺りを探っている。
（なにしてんだ？）
俺は気になりつつも近づいていく。
後もう少し――というところで後ろになにか針のような鋭いものがあたった感触が首筋に伝わり、背後から声がした。
「そこを動くな」

さっきみた夢を思い出した。
俺、さっそく死んだな（ゲームオーバー）・・・。

はてさて、俺が死期を感じ早速この場で死ぬのかと思いきや、そうではなく。
武装した男たち（一人二人ではなく何十名）かに手錠を自分の身体の前にされ、
馬車に放り込まれ、むさい男たちと一緒の空間で数時間ぐらい居座され、
やっと馬車が止まりほっとしたかと思いきや乱暴に腕を掴まれ、
目の前には西洋の巨大な城が建っており、
痛い！痛い！離せ！糞野郎！。などと言ってもスルーされ、
挙句の果てには、独房にぶち込まれた。
んでなんか映画や小説のパターン的に時間がたったらここの扉が開かれて国王か、またはお偉いさんとこに連れて行かれるんだろうなぁ、と思っていたら実際本当にそうなってしまい、二人の兵士に歩かされ赤いカーペットが敷かれた広間に跪かされた。
ここまでは良かった。想像、小説や映画の王道みたいな話の流れだ。
だが、だからと言って、ここで間違いはないだろう！

俺の前に高貴な服装で偉そうな椅子にこれまた偉そうに肘掛で頬づえして座ってやがるこの性別男の　子供（ガキ）はどういったことで？
普通、一般的には無精ひげを生やしたおじさんとか、目つきの悪いおっさんとかじゃねーの普通、一般論としてはさぁ！

「で？お前誰？」
偉そうに言ってきやがった糞ガキ。
（俺が聞きてーよ。テメェ誰だよ。）
「おい貴様！陛下の言葉が聞こえなかったのか！」
その場にいた一人の兵士が言う。武装は勿論してある。

このガキをどうみたら陛下に見えるのか、誰か説明してくれ。俺には十歳にも満たないガキにしかみえないのだが。

「あんたもしかして俺のこと疑ってる？」
そう俺に言った陛下（糞ガキ）。
（もしかしてもなにも俺は最初から一目見た瞬間からあんたの存在を疑ってるよ！）
「ま、無理もないか。俺がこうなっちまったのには訳があるんだよ。まぁそれは今度説明してやっからまずはお前のこと、もう一度言う。お前は何者だ？」
そう言った目の前の子供。

（まぁ、こいつの話を信じるか信じないかは別にして、話してみないと先に進まないんで話すか。）

「俺は赤嶺椿、あんたは？」
俺は手錠をされ、跪いた状態で答えて言った。
「貴様！陛下に向かってなんて無礼な！」
さっきの兵士がまた俺に近づき言う。
「いーよ、別に気にしてないからお前は黙ってて」

子供は兵士に向かって言い、今度は俺に向かって言った。
「赤嶺椿ね、聞いたこと無いなそんな名前。初耳だわ。で、え～と俺の名前だな。俺の名前はノイズ・ヴィガルド・アストール。名前はノイズでもアストールでもあっちゃんでも何でもいいぞ。まぁ場の空気を読めば分かると思うけど、一応国王ね」
「じゃあノイズ、ひとつ質問していいか？」
「普通この場合俺が質問しないか？立場逆転してんぞおい。でもいいや、先に質問していいぞ。えーと、椿、だっけ？」
「じゃあお言葉に甘えて」
俺は一呼吸おき、言った。
「ここはどこだ？」
そう質問されたノイズは困った表情を見せる。
「どこって言われてもなぁ、お前分からないのか？東京だよ東京」
「東京！？」
思わず叫んじまったが、仕方がない。
だって、東京ってこんな田舎っぽくなかったし、西洋の城は建ってないし。
「？、どうした。なんか問題でもあったか？まぁいい、次はこっちから質問だ。」
「はいはい、どうぞどうぞ」
なんか衝撃的なことを知っちまったよ。
穴入ってみたら、東京ってね、俺は夢でも見てんのか、そうなのか。
「でお前どっから来た」
「東京」
「東京なわけないだろ。そんな服装の奴見たことないぜ」
そう言われて、自分の服装を確認する。
白いTシャツの上に灰色のパーカーを羽織り、下は青のジーパン。
すっげぇ手抜き。ファッションに無頓着。

そしてまわりの連中は鎧姿の兵士に、高貴な服装（俺の知識ではなんと言ったら分からない）を身に着けている男達。

（俺、浮いた存在だな・・・。）

「でもよ、東京でそんなファッション見たことねーぞ」
ノイズが言う。
「ん？ああ、そう――みたいだな」
周りの奴らの服装を確認してみて実感。
「もしかして、お前異世界から来ました～とか言わないよな？」
ノイズはニヤニヤしながら冗談みたく言った。
「ああ、実は多分その、俺にも良く分かってはいないんだが――」
俺は頭を掻きながら言った。困った表情を見せたかもしれない。
まぁ実際説明に困ってはいるんだが。
「まぁ、そうみたいだな」
俺は軽く苦笑いしながら言った。
が、しかし場の空気はえらく冷めた空気になってしまった。
さっきまでニヤニヤしていたノイズの表情からは笑みが消えていた。

（あれ？俺もしかしてスベった？）

ノイズは急に真剣目つきで俺を見て言った。
「詳しく聞かせろ、お前がどうやってここに来たのかを」

かれこれ四十分くらいかな？そのぐらい時間はかかった。

俺は何が起こったのかをこの場にいる全員に嘘偽りなく話した。
俺の友人聖歌のこと、廉のこと、神崎のこと、聖歌をさらっていった男のこと。
そしてここに来てからはどうなったのか。洗いざらいすべて言った。
だがしかし、普通に話してれば二十分たらずで終わる内容だった。
ではなぜここまで長くなってしまったのか。
それは、ここに来るまでの兵士たちの俺への態度だった。
扱いは乱暴だわ、人の話は無視するわ、どういうことなんだぁ！・・・・など愚痴に愚痴りまくった十二十分間、合計四十分ってとこか。

「なるほどな。まさかあちらから訪問者がくるとわな。これは以外だ」
俺の話（愚痴も）を聞き終えたノイズはそう言った。

あんた、人の愚痴まで黙って聞いてくれるとは、漢だよ！
俺は目の前の短パンが良く似合いそうな男の子に向かってそう思っていた。
でも、実際この姿が本人曰く現在の年齢ではないらしい。

「で？あんたはその聖歌って子を探すためにこっちまで遠路はるばるやって来たと」
「まぁ、そういうことだ」
掻い摘んで言ってしまえばそうなる。
「なぁ、あんた知らないか？その男のこと」
「ん～そうだなぁ・・・」
ノイズは考え込んでいる様子だった。

しばらくして。
「心当たりがある」
「ほ、本当か！？」
「ああ、でもただでは教えられねぇな」
やらしい顔をしながら言うノイズ。
（国王が悪人面しないでくれ。）
「・・・どうすればいいんだよ」
かと言って俺には金も物もなんももっちゃいねーんだが。
「なぁに、簡単なことさ」
これまた邪悪そうな顔つきで言うノイズ。
（頼むからやめてくれ、その顔。）
「お前、ここで兵士として働け。」
「・・・はぁ！？」
「いやだから、この国に力を貸せって言ってんだよ」
「いや、だから俺武器も防具も特別な力みたいなもん持ってねぇぞ？」

一応言っておくが、さっきから国王と俺の会話のやり取りしか出てないがちゃんと他にも人はいるんですよ？刀を腰に挿して防具は身に着けてない髪の長いの剣士やら、一際目立ったデカイ鎧を装備した角刈りの男とかさぁ、いるんですよ、説明してないだけで。でもってね、このかたがたさっきっから俺のこと睨んでるんですよ？

無理もない、一国の王とタメ口で喋ってる若者がいたら即死んでるだろう。
彼が今、この場で生きていること自体、奇跡なのである。
そして、話を戻すが――

「別にそんなもん求めちゃいねーよ。ただ使える駒はたくさんあったほうがいいだろう？それにお前にもメリットはあると思うぞ？」
そうノイズは言った。
「なんのメリットだよ」
「その方が情報は早く手に入ると思うし、それにおまえ自身がその人を助けたいんだろ？」
（・・・まぁ、たしかにそうだな。そうしたほうがいいよな。こっちの心境を見据えたみたいに言われるのは癪に障るが）
「ああ、分かった。」
「よし決まりだ。ああ、そういや言い忘れてたけど」

（せっかく俺が決心したのにその後に何をいうつもりだ？）

「お前の探している子の名字は六条、なんだろ？」
確認するように言うノイズ。
「ああ、そうだがそれがどうした？」
「ああ、実はよ、さっきの俺の話にもつながることなんだが」
「話？心当たりがあるとかなんとか」
「そうそれ、実はよ、こっから北東の方角にアヌビスっつー神殿があんのよ。そこが昨日何者かに襲われちゃったんだよねー」
「軽い言い方だな・・・。その襲った何者かと、聖歌に何の関係があるんだ？」
「まぁその関係を言う前に、お前の世界では四百年前のことどれだけ知ってる？」
「いきなりなんのことだよ」
「まぁ答えろって、自分の知る限りでさぁ」
「知ってるも何も知らん。全くな」
「・・・やはりそうか。向こうの連中真実を闇の中に隠したな」

「?、どういうことだ」
「まぁ、知らないって言うんだったらしょうがない。教えてやるよ。こっちとお前がいた世界で何があったのかを」

こうして俺はノイズの口からその隠された真実について知ることとなった。
俺の生まれるずっと前に何が起こっていたのかを。

第二話　「状況説明」（前書き）

登場人物紹介。
赤嶺椿（あかみねつばき）　主人公。異世界で兵士となる。
ノイズ・ヴィガルド・アストール　異世界の国王。見た目は子供だが、大人らしい。

第二話　「状況説明」

ここは誰も知らない場所。その知らない場所にある建物の一室。扉が開く。
そこには円状のテーブルと六脚の椅子があり、その一つに退屈そうに座っていた少年がいた。
そこに入っていくのは金髪で短髪の男。椿たちの目の前に現れた男でもあり、聖歌をさらっていった男でもある。
「あっ、カムラお帰り～」
まだ幼い顔つきでそれでもノイズのような大人びた（実際本人曰くすでに大人らしいが）口調ではなく無邪気な明るい声で言った少年は言った。
「よう、チイラ」
金髪の男、カムラは言った。
「あれ？仕事は終わったの？」
少年チイラは、明るく言った。
「ああ、ところで他のやつらは？」
「えっと、レーウェンが用事があって出掛けていて他の皆は部屋で休んでいると思うよ」
「は～ん、なるほどな」
カムラはそう言うと部屋の中を見回す。
たしかに俺ら以外誰もいないな・・・。

「で、その人はどこにいるの？」
「ああ？」
突然、喋りかけられ聞き返すカムラ。
「だーかーらー、六条聖歌さんはどこにいるのって聞いてんのー」

その態度に対して怒った表情を見せるチイラ。
「あああわりぃわりぃ。とりあえず空いてる部屋に寝かせといたよ」
「どこの部屋？」
「ん？えーとなぁ、たしか三番目の部屋、だったかな」
「分かった！」
チイラはそう言うとすぐに立ち上がり、扉のほうまで走って行った。
その様子を見て、カムラは言う。
「おい、何処行くんだよ」
「んー？会いに行ってくるのー」
「今はまだ寝てんぞ」
「いーじゃん、別に。会っても平気でしょ？」
「駄目だ」
「何でだよぉ」
「まだ、お嬢ちゃんはこの世界のことっつーか、それ以前に何がどうなってんのかさえ分かってないんだぜ？もしも、お嬢ちゃんが起きていて、そこでお前が変なこと喋ったらいろいろめんどーなことになっちまうだろ」
「僕、そんなヘマしないもん」
「ほぅ？お子様がよくもまぁ大言壮語を言えるもんだわな」
「たいげんそーごぉ？」
「その反応が正しくお子様の証だわな」
「僕、お子様じゃないもん！」
じゃあ、喋り方をもう少し大人びてみろよ、とカムラは思った。

「・・・ってなわけだ。わかったか、椿」
そう言われた俺なのだが。
「いや、正直話の半分くらいは分かった。分かりやすく話してくれてありがとう、国王陛下。っというべきなんだろうがあえて言わせてもらうけど、せめて、せめてな、もっと楽な姿勢で話を伺いたかったよ！」

そういった彼はさっきまで地獄のような体験をうけていた。
何時間にも及び話の最中、俺はずっと手錠をはめられ、正座のまま長い話を耐えていたのだった。
さて、そんな彼に対して国王陛下であるノイズ・ヴィガルド・アストールの言った言葉は、

「ん？あ、わりぃわりぃ全く気付かなかった。メンゴ」

全く反省の色なし、だった。
近くにいた兵士によって、やっと俺の腕が手錠から開放される。
（あ～やっべ。足痺れちまったよ。）
ぎこない様子で立ちあがる。

「・・・一般的に国王って温和で誠実な人物だってきまったるはずじゃねぇか？」
「あ？そんなもん誰が決めたんだ？俺は俺だろ」

（こいつ、見た目ガキの癖してもっともなこと言いやがって、マジでむかつく。一発殴らせろ。）

「まぁ話を理解してくれたのは大いに結構、うれしい限りだ」
そう言うと、ノイズは一人の部下に手招きをした。
そして、部下の懐から一本の葉巻とを出しそれをノイズが口に銜えて、そして次に部下の懐からマッチが出され、それに火をつけた。
「あ～、やっぱこれだわ」
すごい画だった。
「・・・未成年者禁煙法って知ってるか？」
「ああ？そんな法律ねぇよ。それに俺成人してるし」
「お前何歳なんだよ？本当は皆して俺を騙してんじゃねーのか？」
「二十八」
「ハッ、口からだったら何でも言えるわな」
「貴様、いい加減にしろ！！」
とうとう我慢の限界だったのだろう、最初に怒鳴ってきた兵士がまた怒鳴る。
「陛下が許したとはいえ、もう我慢が出来ん。陛下、今すぐこの者に処罰を！」
「そうカリカリすんな。大事な客なんだからよ。それに今さっきより仲間になったんだからよ、もう少し仲良くしようぜ」
ノイズはだるそうに言った。
「し、しかし――」
それでも納得がいかなかった兵士は言葉を続けようとするが、
「聞こえなかったのか？俺は話の邪魔すんなって言ってんだ。いち

いち何度も言わせんじゃねえ」
その言葉を聞き、兵士は黙ってしまった。
「さて、空気が少し重くなっちまったか。で何の話をしてたっけか椿？」
さっきの発言で分かったことだが、こいつは本当に陛下みたいだな。
「あ、ああ、俺のいた世界とこっちの世界の話だろ」
「そうそれだ。なんか質問あっか？」
「じゃあ、とりあえず一つ」
「はい、どうぞ」
「なぜ、六条永久が送られた理由を隠蔽してしまったんだ？」
「あ～、それはな。六条家には不思議な能力を持っていた、っていったろ？」
「言ったな」
「その中で唯一、六条永久だけが少し異なった能力を持っていたんだ」
「異なった？」
「彼女には人に力を与える能力を持っていた。つまり、六条家じゃない者でも力を得てしまう恐れがあったんだ」
「それは、すごいな。けどそれと送った理由を隠蔽することとどうつながるんだ」
「まぁ話聞けって。彼女はその力を持っていたゆえに、こちらに送られてしまった。そこまではいいな？」
「ああ」
「そして、能力の他に彼女には恐れられていたものがあった。それが「人望」」
「人望？」
「ああ、彼女はとても温和な性格だった。誰にでも優しく皆平等に

愛した。それゆえに、彼女は当時のお前の世界の王に目の敵にされてたんだよ」
「なんでだ？」
「はぁ、お前馬鹿か。普通国王以外に人望がある奴が現れたら自分の地位が危いことになるのがわかんねぇのか？」
「・・・お前には人望があるのか？」
「ああ、もちろんあるな。この世界中の人々に愛されて必要とされてる自信が俺にはある！」
「どっからわいててでてくんだよ、その自信とやらは・・・」
「まぁ、そういうわけだ。それで彼女が自分自身の意思ではなく向こう、つまりこっちの世界に送られた真実を知ってしまったら、各地で反乱が起こる恐れがあったんだ」
「なるほどな、だから真実を隠蔽し、真実を知っている者には口封じをしたわけだな」
「そういうこった。他に質問は？」
「・・・そういや思ったけどよ。なんでその閉鎖、だっけ？したのに俺やあの男が自由に出入り出来たんだ？」
「その件に関しては俺にもよく分かってはいない。ただ、仮説として答えるならまだ完全には閉じてはいなかった。ということだと思うぜ？他には？」
「特にない」
「そう、なら話を進めようか。さっき言った六条のことだが」
「ああ、そういやさっき言ってたな」
何時間も前のことで頭の中から消えかかっていたことが言われてパッと思い出す。
「その六条っていう名字がどうかしたのか？」
「六条永久がいたっていう事実はさっき話したとおりだ。そして彼女の周りにはある集団がいた」
「ある集団？」
「そ、名前は明らかにされてないし、彼女との関係性もよく分かっ

てはない謎の集団。そいつらは永久が死んだ後どうなったかは不明だった、が最近になって突然現れてきた。しかも六条と名乗ってな」
「もしかして、その六条って名乗っている奴らが聖歌をさらっていったり、アヌビス神殿を襲ったりしたのか？」
「かもしれねぇ」
そう言ったノイズはくわえていた葉巻を指の間にはさみ、少し俯く。
「そいつらの居場所は分かっているのか？」
俺は聞いた。
「いや、全く分からん。密偵を各地にとばしてはいるが未だにな」
首を左右に振り質問に答えたノイズは立ち上がり、葉巻を近くにいた兵士に灰皿を出させ火を消した後、俺の目の前まで近付いてしゃがみ言う。
「で、お前実戦経験は？」
俺の目の前でそう聞く。
「実戦経験なんてない。武器自体持ったことない」
「ふ～ん、向こうの世界は随分と平和なもんで。まあ、今から教えてやるから心配は無用だ」
「今からって・・・」
（どうゆうこと？・・・）

するとノイズはにっと笑い、さっきからいた長い髪の剣士に向かって「カシム！」と呼んだ。
どうやらこの男の名前はカシムらしい。
カシムはノイズに呼ばれると静かに「はい」と答えた。
「お前、椿に武器の扱い方を教えてやれ」
「かしこまりました。国王陛下」
そう言って頭を下げたカシムは俺に近付き、俺の髪を掴んで広間から出て行こうとする。
「いって！何すんだ、離しやがれ！」
そう言っても離そうとはしない。それどころかズルズルと髪を掴み

ながら引きずる
「だから、離しやがれってんだよ！！」
それでも、無視するカシム。
「それじゃあ、がんばってれよ～」
のんびりとした口調で言うノイズ。
そして、扉を開け俺を引きずりながら出ていった。

「にしても・・・」
二人が出て行った後ノイズはぽつりと呟く。
「六条、か。あの野郎、今度は一体何をするつもりだ・・・」

第三話　「初稽古」

「違う、何度言ったら分かるんだ！！」
また怒鳴られ木刀で手首を叩かれる。その勢いで握っていた木刀が手から離してしまい落としてしまう。
「しっかりと握ってないから落とすんだ。しっかり握れこのクズ野郎！」
ノイズから実戦練習のためにこいつ（カシム）から教わってはいるが、これって単なるイジメだよな？
現に練習を始めた時はまだ太陽が上がっていたが、今はもう沈みそうだった。

「何してんだ！さっさと拾えクズ」

そしてさらにこいつから今までの時間の間、名前で呼ばれなかった。
さっきから「クズ」か「クズ野郎」でしか呼ばれていない。
ああ、今すぐイジメ相談室にいきてぇ。相談にのってもらって俺の心を癒してもらいたい。
あ、出来れば奇麗事をバシバシ言ってきやがる熱血馬鹿ではなく、優しくて綺麗なおねぇさんがいいです。

木刀を手にする。
ちなみに俺が今やっているのは初心者の基礎、素振りだ。
いかんせんこんなものを持ったことが無い俺は、さっきからこれに苦戦中。
さらに、言わせてもらうならこの城に来てから飯を食わせてもらってません。

ドメスティックバイオレンスです。
ん？いや違う。虐待です。こんな奴と親密な関係じゃありません。
「貴様、無駄なことを考えているな。心を無にしろ、このクズ野朗！！」
木刀で背中を叩かれる。
（・・・なんでだろう？なんか罵られたり、叩かれたりすると向上心というかやる気が出てくる。ま、まさか、お、俺、Mじゃないよな・・・。）

「む、もう日が暮れてしまったな。貴様のせいで貴重な時間を費やしてしまったではないか！このクズ野朗！！」
「も、もう少し、愛を下さい」
（ああ、今なら分かるぞ、神崎。お前もこんな苦しい思いをしていたのか。ごめんな。今度再会したら、もっと優しくしてやるからな！）

「まぁいい、明日朝早くにここにまた来い。まぁ常人にしては上達が早いほうだ。その調子で向上していけ、じゃあまた明日」
木刀を持って、去っていくカシム。
「つ、つかれた・・・」
そう言ったまでは覚えてはいるのだが、それ以降の記憶が無い――。
気がつけば、俺はベッドの上で寝ていた。

「あっ、気がつきましたか」
声が聞こえた。
身体を起こす。そこには、眼鏡を掛けていて三つ編みをした少女がいた。
（状況がいまいち分からない。なんで俺はここにいるのか、ここはどこなのか。）
「あ、私メリルって言います。このお城で医者をしているものです」
まったく状況を読めてない俺に対してそれを知っているかのように彼女はそう自己紹介をした。
「あっ、俺は赤嶺椿、です。えっと、君が俺をここに運んでくれたの？」
「はい、正確には手当てもしました」
（ん？手当て？）
身体中を確認する。本当だ。腕や腹に包帯が巻かれてる。
（えっと、そうか。あのドSにやられたのか。くっそ、あの野朗加減ってことをしろよ。もし俺が新しい世界の扉を開けてしまったらどうすんだ。俺はもう俺には戻れなくなってしまうかもしれなかったんだから、とてつもなくゾッとする話じゃねぇか、まったく。）

「あの、お怪我のほうは大丈夫ですか？」
「ええ、もう大丈夫ですよ」
腕をまわしながら答えたが実際そうではなく、肩に痛みが走った。いってぇ、そう呟いてしまった。
「あらあら、まだ完治してないみたいですね。嘘は駄目ですよ」
メリルはそういうと棚から、マグカップを取り出しその中にスプーンで何かを入れながら言った。
（多分、薬かな。）
「すみません。もう大丈夫だと思ったんですがね」
あははははっと笑った。やっちまいましたよ～。

（ん？そういや、俺敬語使うの懐かしいな。ってかここでは初めてじゃん。）
メリルはマグカップにお湯を入れる。マグカップから湯気が立ち上る。
「そういえばさ、椿くんはさぁここに来てどれぐらいたつの？」
「いや、実は今日が初めてなんですよ」
「へぇ、そうなんだ。じゃあ今日が初稽古ってことなんだね」
「まぁ、そうですね」
そんな会話をしていたら、飲み薬が出来たようだ。
「はい、どうぞ」
メリルから、マグカップを渡される。
「あ、どうもすみませ・・・」
マグカップを手に取り、中を見たら絶句した。
（な、中になんか得体の知れない物が入ってる。なんか入ってる。明らかに不自然に入ってる。その「何か」が分からない。だって液体の色がコーヒーみたいな真っ黒な色だから分かりません。しかし、俺でもわかる。絶対なんか入ってる。）
「？、どうしたの、飲まないの？冷めちゃうよ」
いや、飲まないっていうか飲む勇気が俺にはないというか。
「もしかして、まだどこか痛むの？」
心配そうな表情を見せるメリル。
（俺はあなたが入れたものが怖くて飲めませんって言えない、絶対言えない。どうしよう・・・。）
しかし、だがしかし、たとえどんなブツが入っていてもだ。
ここまで運んでくれて手当てもしてくれてさらには俺の体調をきずかって飲み薬を出してくれたわけなんだし。
やはり、男なら飲むべきだ。
うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお、俺は心の中で雄叫びをあげた。
これで大丈夫！、大丈夫！！、大丈夫！！！

いざ、尋常に！口の中に一気に流し込む。その中に入っていたブツは口の中に入る。
・・・てか、思ったよりデカイ！口の中にある　口蓋垂（こうがいすい）にモロに当たる。思わずウッと言ってしまった。しかし俺は負けない。その何かを丸呑みにした。それは蛇が獲物を食うように。正直噛めば良かったのだが、噛む暇が無かった。しかし、飲み物の方は意外なことに苦くなかった。なんか不思議なことに、海藻っぽい味がしたんだが・・・。
「えっと、この薬、どういった効能があるんですか」
気になってしまいたまらずに聞いてみる。
（まぁ、こんなもん飲んどいて気にならない奴はいないと思うが。）
「え？何言ってんですか？それは薬じゃないですよ」
（・・・どういうこと・・・？）
「それは私が作ったスペシャルドリンクですよ。私、昆布が大好きで、ありとあらゆる昆布を集めてそれを擦って入れたんですよ～」
「それは、ミネラルがたっぷりなドリンクですね・・・」
「どうです、おいしかったでしょ！」
「まぁ、そうですね・・・」
あまりにもキラキラとした眼をされたので、同意してしまった。俺としては味はまぁまぁだったのだが。
「ところで、何を入れたんですか？」
そう、それが本題。何をぶち込んだのか、それが問題だった。
「えっ、分からなかったんですか？あれは私が作った特性酢昆布ですよ」
「せめて、別々にしてくださいよ！」
（あなた、どんだけ昆布にこだわるんですか・・・。）

「あ～～～、今日は疲れた～～～」

俺はそう言いながら、自室へと向かっていた。
さすがに体調が良くなってきたからあそこに長居するのもどうかと思ったのでこうして自室へと向かっているのだ。
ちなみに自室への行き方はあのガキからあらかじめ説明をうけていたので、そこまで向かっている。
兵士に与えられている部屋は大抵二人で相部屋らしい。さすがに寝食を今日から共にする相手なのですごく気になる。俺と同い年だったらいいな～。または大人しい人物でも平気だな～。
「さて、ここが俺の部屋か・・・」
一つの部屋の前で立ち止まる。そして、ドアをノックする。
「すみませーん。今日からここを利用させてもらうものなんですがー」
返事は返ってこなかったが、扉が開いた。
しかし、そこにいたのは――
男なのに長髪。不機嫌そうな顔。
数時間前まで、俺に「飴と鞭」ならぬ「鞭と鞭」を与えた剣士がそこにいた。
「なんだ、貴様だったのか。俺と相部屋なのは」
そこにはカシムというドSな剣士が、俺の目の前に立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5022i/

夢現物語

2011年1月20日02時48分発行